危険なアルバイト

作＝クモ男

玉木太郎（２８歳）は、インディーズのプロレス団体ＺＺＺに所属する未だ独身のプロレスラー。太郎は元ボディービルダーということで、『マッスル玉木』というリングネームで正統派レスラーとして肉体美を売り物に活躍していた。

しかし長引く不況のため、ＺＺＺの観客数も興行収入も右肩下がりになり、太郎の生活も徐々に苦しくなっていた。

あるオフの日、太郎は求人雑誌に目を通していた。この先、プロレスだけでは飯も食えなくなると悟った太郎は、バイトをすることにしたのだ。本職のプロレスの仕事と両立できるバイトを探していた太郎は、さっそく興味深い募集を発見した。

＜マッチョな男性モデル募集・バイト可＞

「お！これいいな！」

詳しいモデルの仕事の内容については一切書かれていなかったが、とりあえず太郎は応募することにした。

モデルのバイトの面接日が来た。ある雑居ビルの３階にそのモデル事務所はあった。事務所名

は“オフィスＢＢ”。太郎はこのBBが何の略なのか分からなかった。事務所前に着いた太郎は、ドアの横にあるインターフォンのブザーを鳴らした。

<ピンポーン>

「はい、オフィスＢＢです。」

若い女性の声がインターフォンを通じて聞こえた。

「本日面接に参りました玉木太郎と申します」

「あ、はい。お待ちしておりました。どうぞお入りください」

太郎はドアを開けた。ひとりの女性しか事務所にはいなかった。彼女は笑顔で太郎を迎えてくれた。

「お待ちしておりました。どうぞ、こちらへ」

２０代半ばであろうその女性は面接室へ太郎を案内した。

「どうぞ、こちらへ」

太郎は案内されて面接室に入った。

「どうぞ、こちらのイスにおかけください。そんなに硬い面接ではないので、リラックスしてくださいね」

清楚な雰囲気のこの女性に、太郎は好感を持った。

「私、オフィスＢＢ代表取締役の小谷美和と申します」

そう言いながら、美和は太郎に一枚の名刺を両手で丁寧に差し出した。太郎も両手で丁寧にその名刺を受け取った。

「それでは、早速ですが、面接を始めさせていただきます」

「はい。よろしくお願いします。」

「履歴書を拝見させていただきましたが、玉木さんは現在もプロレスラーなんですね」

「はい。インディーズの小さな団体ですが、プロレスが私の本職です」

「ちなみに身長と体重は？あと、体脂肪率はわかりますか？」

「身長は１７５ｃｍ、体重は１００ｋｇ。体脂肪率は１０％前後です」

「わかりました。では、あちらの奥の部屋に移動してこれに着替えてください」

そう言いながら、美和は太郎に赤いＴバックを手渡した。

“なるほど、俺にこれを着させて俺の肉体美をチェックするんだな”

太郎はそう思いながら、着替えるため奥の部屋に移動した。そこは２０畳ほどの広さの部屋で、床にはレスリング用のマットが敷かれ、窓にはマジックミラーのようなものが貼られ、壁には大きな鏡が設置されていた。

「それでは、着替え終わったら私を呼んでくださいね」

「わかりました」

太郎は返事をしながら思った。“ここはなんの部屋なんだろう”

太郎はTバックに着替え始めた。プロレスでもショートタイツを着用するため、日頃から陰毛を処理していた太郎。しかし、このTバックはかなり小さいため、太郎はペニスと金玉を収納するのに苦労した。太郎はペニスを右斜めに上に向け、金玉を無理やりTバックに押し込んだ。

着替え終わった太郎は鏡に向かってマッチョポーズをとった。太郎は元ボディービルダーのプロレスラーだけに、肉体美では他のプロレスラー達を圧倒していた。頭の横幅よりも広いような頑丈な首。肩、腕、さらに胸の筋肉も大きく盛り上がり、腹筋は仮面ライダーのようにキレイに割れていた。丸太のようながっちりした脚の筋肉も彫刻されたようにくっきりと浮き彫られていた。そして、大きく盛り上がった股間も『男らしさ』をアピールしていた。

「着替え終わりました」

Tバック一枚の姿になった太郎は部屋の外にいる美和に呼びかけた。

「はい。今、そちらにいきます」

太郎は部屋の中で待っていた。“どんなモデルの仕事なんだろう。”いろんな考えが太郎の頭の中をかけめぐった。すると、美和が部屋に入ってきた。

「おまたせしました」

太郎は美和の姿を見てあ然とした。美和も赤のTバックの水着に着替えていたのだ。

そして、その姿は美しかった。みずみずしいピンク色の唇。甘く熟したメロンのような大きな胸。キレイにくびれたウエスト。そして新鮮な桃のようにピチピチしたヒップ。そして太郎のモ

ッコリしている股間とは対照的に、美和の股間はすっきりとフラットになっていた。

美和は急に色気のある声で太郎に言った。

「あたしを抱いてください」

「え？」

「あたしを抱いて。抱いてくれたらモデルの仕事の内容を教えてア・ゲ・ル」

太郎は少しためらったが美和に近づき、ぎこちなく優しく抱いた。女性を抱くのは太郎にとって久しぶりだった。ましてや初対面の女性を、しかもお互い水着姿で抱くというのは生まれて初めての経験だった。

「こ、これでいいですか？」

「もっと強く抱いて」

太郎は訳がわからないまま、美和をもう少し強く抱いた。美和は太郎の小麦色の胸に軽くキスをした。太郎は性的に感じてしまった。そして太郎は美和のキレイななじを見つめながら、自分の本能が理性を少しずつ制圧し始めていることに気づいていた。さらに、密着しているため美和の乳首の突起部分を太郎は肌で、いや、筋肉で感じ取っていた。そして、美和の髪から『女性の香り』が漂っていた。視覚、触覚、臭覚の3本責めだった。

すると、美和の右手がスルスルと太郎の股間へ移動していった。そして、美和は右手でTバックに収納されている太郎の金玉を下側から優しくタッチした。

「ああ・・・」
　思わず声をあげる太郎。完全に本能が理性を支配し、太郎のペニスは大きく膨らんでいった。
美和は優しく太郎の金玉をマッサージし始めた。
「気持ちいい？」
　美和がたずねた。
「は、はい・・・」
　太郎は欲情しながら答えた。美和は太郎の金玉を優しく揉みながら話し始めた。
「よかった。ウフ。あのね、オフィス**BB**では、ある面白いことをモデルさん達にしてもらって、それを撮影して、それをビデオ化して販売しているんだけど・・・太郎さんには、その中でも特別なモデルをやってもらおうと思っているの」
「は、はい・・・」
「特別に面白いことをやってもらうモデルなの」
「は、はい・・・」
「その特別なことって何かわかる？」
「さ・・さあ・・・」
「じゃあ・・ヒントは・・・この事務所の名前」
「ＢＢですか・・・？」

「そう！　つまり、ＢＢを受けてもらうモデルなの。ＢＢを1回受けてもらうと１０００円が支給されるの。だから、もし太郎さんが１日１０回ＢＢを受けると１０，０００円が太郎さんに支給されるの」
「そ、そんなにですか・・・でも、その・・・ＢＢってのは何なんですか・・・？」
「知りたい？」
「は・・はい・・」
「ＢＢっていうのは、ボール・バスティングの略なのよ」
「ボール？・・・・・バスティング・・？」
「そう・・・つまり・・・金玉潰し・・・・例えば・・・・こういうこと！」
　そう言った瞬間、美和は、射精寸前の太郎の金玉を力いっぱい右手で握り締めた。激痛が太郎の股間を走った。
「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」
　太郎は、叫び声ともうめき声ともとれる雄叫びをあげた。排出寸前だった精液は逆流し、熱く膨らんでいたペニスも瞬時に縮んでいった。
「これが、ＢＢの一例よ。わかったかしら？　そして、このモデルの仕事を引き受けてくれるかしら？　引き受けないと言うなら、このまま本当に潰しちゃうけど」
　ＳＭの女王様に変貌した美和は微笑を浮かべながら太郎に言った。太郎は顔面蒼白になりなが

ら必死で答えた。
「わ・・わかりました・・引き受けます・・・」
「そう。いい子ね」
そう言うと、美和は右手を太郎の股間から離した。
小麦色の筋肉の巨体は『くの字』になって床の上に倒れた。太郎は両手で股間をおさえ、全身をプルプル震わせながら悶絶した。
そして美和は勝ち誇った表情をしながら1枚の千円札を悶えている太郎の体の上に置いた。そしてまだ悶絶している太郎を見下ろしながら美和は言った。
「はい、これが今の分のお給料。玉木さんのモデル名は『筋肉男』で決定ね。本番の撮影の時は、Tバックとマスクを着用してもらいます。顔がバレちゃ困るもんね。プロレスの試合がない時にビデオ用の撮影ができるように、こちらでスケジュール調整しますんでよろしくね。オフィスBBに登録している女性モデル陣は手ごわいから気を付けてね」

その日から、太郎の危険なバイトが始まった。